

フォーカス



仙教ライフ

時代にはその時代の物語がある

「未来を信じていた時代」

時代には、その時代の物語がある。戦後、高度成長とともに、商品やサービスを買ったことが、豊かな生活の源であり、家族の豊かさも、必要なものをそろえていくという

「希望の達成」が物語の中心にあった。

2005年に話題となった映画「ALLWAYS——三丁目の夕日」は、1958年という高度経済成長始動期の東京を舞台にしていた。映画のキャッチコピーには、「人びとが未来を信じていた時代」とあった。

この時代、人々は未来に希望を見出し暮らしていた。反面、「希望の達成」に価値

が置かれている社会では、「死」は隠されてしまう。この世での希望は、生きる時間があるという保証の中に成立する。死は「希望の達成」を無価値にしてしまうからだ。

がんの専門医であるロバート・バックマン氏は、この時代を「死にくい時代」と語っている。年老いたものが家庭で死を迎えることがなくなって、死が「よそのもの」となり、健康への期待は、死は永久に防止できるという錯覚を生み出す。

平成時代となり、それまでの好景気の波が大きく沈み、経済が停滞し、大きな自然災害にも見舞われた。時代は、さまざまなライフスタイルを生み出し、価値観の多様化が主流となっていた。それとともに自己決定権の尊重は、共通の価値観のないま

まに、信頼という絆が失われていった。

そして21世紀に入り、社会学者のジグムント・バウマン氏は、『液化化する社会』と、この時代を定義した。結婚一つとっても、欧州では、こうあるべきという一つの固まった形がなくなり、価値観やライフスタイルが、水のように流動化した時代。それが現代でもある。バウマン氏は、興味深いたとえを説いている。

「伝わる」ように伝える

いかだ乗りは川を下るとき、川の流れに乗って進むのでコンパスを必要としない。それに対し、広い海を航海する水夫はコンパスなしというわけにはいかない。いかだ乗りは、川の流れに身を任せつつ、時折、櫓や竿を使っていかだが岩にぶつかったり急流にはまったりしないように、いかだを

うまく漂流させる。しかし、もし船の行く手を、気まぐれな風や移ろいゆく流れに任せたり、とんでもないことになる。水夫は船の動きの主導権を握る必要がある。行く先を決めなければならぬし、そこへたどり着くには、いつどちらへ向かえばよいかを示してくれるコンパスがなくてはならない。『リキッド・ライフ―現代における生の諸相』より)

バウマン氏が指摘しているように、現代ほど、コンパス、つまり何を指針として生きるかが問われている時代はない。

たとえば環境問題。昭和の時代であれば便利で快適であることを重視し選択していた。現代は、バックキャストという「未来のあるべき姿」から「未来を起点」に解決策を見つける思考法が導入されている。バックキャストは、物事を考える指

針の一つに過ぎないが、何を指針として物事を考えるかが問われている時代でもある。

浄土真宗という仏道を親鸞聖人は「畢竟依を歸命せよ」と和讃に示されている。畢竟依の畢を辞典で調べると、「ことごとく」とあり、「竟」は「最後の境界までとどく」とある。畢竟依とは、すべての人の究極の依りどころ。いつでも、どこでも、どのような状態にあっても、私の支えとなってくれる教え、はたらき、ぬくもり、それが阿彌陀如来のご本願だ。生きる依りどころとしての浄土真宗。変わりどおしの私が変わらない私になるのではなく、変わりどおしの私を、そのまま受け入れてくださる大悲のみ教え。このみ教えは、浄土真宗の門徒だけが享受するのではなく、生きる依りどころとして、人類のすべての人に「伝わる」ように伝えていかなければならない。